

対人援助学 & 心理学の縦横無尽



福島、ふくしま、Fukushima（4）

福島県浪江町訪問記（2）

プロローグ

2013 年 6 月に引き続き、2015 年 11 月にも福島県浪江町を訪問することができました。今回の訪問は土曜講座での講演の仕込みのためです。以下で、東日本大震災後の福島との関わりについて簡単に振り返ってみました。

なお、対人援助学マガジンには既に 3 回にわたって連載してきました。今回の拙稿はそれに続くもので浪江町訪問記としては（2）、福島、ふくしま、Fukushima としては（4）となります。

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol10/19s.pdf>

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol11/16.pdf>

<http://www.humanservices.jp/magazine/vol14/17.pdf>

1 東日本大震災と福島第一原発事故

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災。その直後の大津波は太平洋側の各地を襲いました。福島県双葉郡大熊町・双葉町に立地する福島第一原子力発電所においては、全電源喪失の事態となり、水素爆発が起き、大量の放射性物質が環境中に放出されました。水素爆発のあった 3 月 12 日以降、大気中に放出された放射性物質は折からの南東の風に乗って北西の方角へと流れ、やがて雨によって地上に降下しました。その影響は浪江町から川俣町、飯舘村は言うに及ばず、福島市にまで及びました。

個人的なことです。私がかつて住んでいた福島市渡利は放射線量のホットスポットとして有名になりました。

風の通り道は、山と山の間、それは即ち川の上であり、川の周辺には人が集まり住んでいますから、風の通り道は人の住む所に他なりません。福島県浪江町の形は、東西に伸びた形です。そして一部が狭くくびれています。どうしてかという



と請戸川という川の流域に人々の生活圏が出来ていたからです。今と違って水運が交通の要だった時代には、同じ川の流域が 1 つの生活圏を形成していたのです。今では請戸川沿いには国道 114 号線が通り、車での往来も容易になりました。

川は低地にありその周辺が山であれば、放射線を含む風が、人の住む場所を通していくのは半ば必然だったと言えます。事故当時は、事故を起こした原発からの距離で一律に避難をしていましたが、それは全くおかしいことだったのです。原発からの距離ではなく、風がどのように吹くのか、ということこそ重要な情報だったのです。

日本原子力研究所が開発していた緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム (System for Prediction of Environmental Emergency Dose Information、通称:SPEEDI) といシステムは、わりと正確に放射線の拡散状況を比較的正確にシミュレーションしていたことが後に分かりましたが、当時は近隣住民には提供されませんでした (文部科学省は外務省を通じて 3 月 14 日に米軍に提供していました)。もしこの情報が人々に伝わっていたら無用の被爆をせずにすんだ人が多かったと思われます。SPEEDI 関係者は、情報を提供することでパニックになることを恐れたなどと言っていますが、これはむしろ官僚達がパニックになったが故に情報提供を控えた、と解釈すべきだと思います。こうした状態のことをエリートパニックと呼ぶことがあります。これは災害社会学者キャスリーン・ティアニーの言葉です。

2 福島との絆が復活

私は 1994 年から 2001 年まで、7 年間だけではあるものの、福島大学行政社会学部助教

授として福島に住んでいました。そのことが、今回の震災後に様々な活動をした原動力であることは間違いありません。震災直後、未曾有の大震災に際して、かつての同僚達がいろいろな形で奮闘している姿を見ながら側面支援はしていたのですが、福島に住んでいたから支援しますというのも白々しいかと思い、自分として何をすればいいのか分からず1年が過ぎていきました。

支援するとかではなく、自分が福島に乗り込むのでもなく、かつての同僚を京都に招いて研究会を行って福島の様子を発表してもらえば良い、そのように考えがまとまった時には既に1年が過ぎていました。2012年3月29日 原子力と生存学研究会・特別企画ワークショップ「震災・大学・放射能～福島大学教員をお招きして」という会合を行いました。福大在籍時の私の遊び仲間でもあった？永幡准教授など4名をお招きしました。



そこから福島の人たちと縁が復活し、2012年6月12日には福島大学に招かれて風評被害に関する講演（「風評被害の構造」）を行う機会をいただきました。

さらに同時進行的に、立命館大学災害復興支援室を立ち上げた今村正治総合企画室長（当時；現APU副学長）に誘われ、福島で日本再生大学を作る企画に誘われたり、研究高度化事業（震災復興）に応募したところ採択されたりして、福島を訪問する機会が増えました。震災後最初に福島の浜通



り地方を訪れたのは2012年6月のことでした。バルト三国の1つであるエストニア・タリン大学から来日したカトリン・クラセツ准教

授に「福島に行ってみたいか？」と尋ねたところ、行きたいという話だったので企画をしました。茨城大学の伊藤哲司教授の協力も得て、車で回ることができました。震災1年を経た時期、当然、立ち入りできないところも多く福島第一原発から北側の放射線量の低い地域を車で移動しましたが、その時の景色には唖然としたものです。朽ち果てた車がそのままになっているのは当たり前、でした。震災後1年以上経っていても、ほとんど後始末がされていなかったのです。



2013年8月23日には、福島県の内堀雅雄副知事（当時；現県知事）がBKCを訪問する機会があり、若い人たちと意見交換会をしたいというリクエストがありました。ゼミ生と共に私も同席することができました（これがきっかけで福島県と立命館は後に連携協定を結ぶことになります）。



この後、応用社会心理学ゼミ（サトゼミ）の学生の1人が、卒論に福島の状態を取り上げる決断をして通い始めたり、ゼミ生の企画が福島県の事業「若者による情報発信事業『いいね！ふくしま』」に採択されたりして、ゼミ生達が福島に行く機会を提供することができました。研究面でも福島との結びつきが増えました。福島と言えば松川事件（1949年に起きた列車転覆事件をめぐり最終的に多くの無罪判決が出た事件）、ということで法心理学のプロジェクトの一環として福島を訪問することもありました。さらに、『TEA 理論編・実践編』（新曜社）の執筆合宿を行ったこともありました。私が福島大学行政社会学部の教員だったことは、大震災の前までは、私にとって単なる履歴の1つでした。しかし、東日本大震災によって新しい意味が付与され、カッコ良い言葉でいえば、絆が復活したのです。私は1年ほど福島に行くことを逡巡していたのですが、かつて同僚だったある先生は、福島大学で私の顔を見つけるなり「来るのが遅い！」と笑顔で迎えてくれました。私と同世代だった先生方は学部長などを務めているし、中井勝巳先生にいたっては今では福島大学学長です。

また、元同僚達にいろいろな人々を紹介してもらいました。たとえば、ふくしま土壤くらぶの皆さんです。震災直後から行政に頼らず自分たちで除染を行い、文献を読み、安全・安心な果物作りに邁進してきた人たちです。徹底的に勉強し、徹底的に土壤作りを行い、徹底的に安全な果物を生産し、何よりも、検査も徹底的にやって徹底的に安全確認をしているので安心です。会長の高橋賢一さんは朝日新聞連載『プロメテウスの罠』にも登場しています。一度お会いして話をうかがえば誰でもその情熱と成果に圧倒されると思います（ちなみに奥様は元ミス・ピーチ）。私たちは福島に行くとはほぼ毎回、たかはし果樹園を訪れて四季折々の果物を買って求めています。



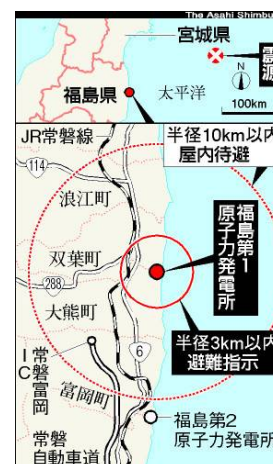
こうして広がったネットワークのうち、最も大きなものの1つが、鈴木典夫福島大学教授から紹介してもらった笹谷仮設住宅（正式には福島市笹谷東部応急仮設住宅）との出会いです。ここには、浪江町の皆さんが住んでいらっしゃいます。浪江町は2015年11月末現在でも、全域が避難指示区域となっていて居住はできません（町役場は二本松市にあります）。

浪江町民の避難先は、福島県内が約7割、県外（現在、和歌山県を除く全都道府県）が約3割で約3,300人が福島県内の仮設住宅で暮らしています（東日本大震災当時の人口は約21,000人。2015年10月現在の住民登録数は約19,000人）。

なみえ焼きそば、という名前を思い出す人がいるかもしれません。2013年11月に愛知県豊川市で開かれた第8回B・1グランプリで1位を獲得した、あのB級グルメも浪江がふるさとなのです。私たちが笹谷仮設住宅を訪れた際には、おいしい焼きそばを作っていたこともあります。

3 浪江町の2年前と今（2015年11月）

笹谷仮設住宅自治会長の熊田伸一さんに「浪江町の現状を見てみないか」と誘われたのは2013年6月。その時のことは『対人援助学マガジン』第14号において報告しました。震災後2年数ヶ月「も」たったのだから、それなりに復興なり何なりが進んでいるのだろうと思ったところ・・・。





浪江駅は、何事も無かったように建っていましたが、駅の近くの民家は屋根が崩れたまま。海に打ち上げられた船はそのまま、自動車もそのまま、という具合でした。繰り返しますが、震災後2年以上たった2013年6月のことでした。

ここまできて、やっと本題です。今はどうなのでしょう？

2015年11月下旬、サトゼミ有志は再び福島県に向かいました。2015年11月現在、浪江町はその全ての地域において居住が認められていません。その意味で、状況はあまり変わっていません。今回もまた熊田伸一さんのご厚誼を得て、浪江町に入らせていただきました。検問があり、通行証確認が必要です。町民のみなさんは、許可を得れば、立ち入り禁止区域に入ることができます。逆に言えば、自分がかつて住んでいた家に、行政から許可を得なければ戻れない、のが浪江町民の現実なのです。福島第一原発事故がもたらしたこの事実から、私たちは何を学ぶべきなのでしょう？



まず、県立浪江高校津島（分）校の様子。ここは福島第一原発事故の直後、避難所になっていたところです。なぜなら、原発から20km以上離れているから。放射性物質は風に乗って拡散するのですから、距離よりも風向きが重要なはずですが、Speediのデータは国

民に公表されず、人々は 20km 以上離れた場所として津島（分）校を選び、かえって被爆してしまったのです。このことの責任は誰がとるのか、はっきりしてほしいと思うのは私だけではないでしょう。



津島（分）校にはモニタリング・ポストがあります。数値を見ると毎時 5.089 マイクロシーベルト。この数値がどういうものなのか、多くの人には分からないと思います。簡単に考えるために毎時 5.1 マイクロシーベルトだとして、24（時間）と 365（日）を積算（かけ算）すると年間の放射線量が計算できます。44.7 ミリシーベルトになります。国は 5 年を経過しても 20 ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域を帰還困難区域と定めていますが、まさにそれにあてはまる地域であることが分かります。さらに、余計なお世話ではありますが、モニタリングポスト近くの地表近くを測定すると 12.2 マイクロシーベルトでした。これは年間で 106.9 ミリシーベルトです。ここで、モニタリングポストが不正確だと言ってはいけません。除染を最大限頑張ってもこれ以上は下がらない値がモニタリングポストの数値なのであり、地表の数値は、その理想値よりはもっと高いことを私たちが理解すべきなのです



次に浪江駅の様子を見てみましょう。ここは海岸から遠く、放射線量もそれほど高くなく、駅もそのまま。しかし、駅周辺に足を運ぶと、傾いたままの店舗など、直ぐに目にすることができます。



さらに、海沿い。熊田さんのご自宅があった、海岸沿いへ。かつての三世代住宅は基礎部分を残すのみです。



最後に、請戸小学校に足を伸ばします。この小学校は、一階部分が津波でさらわれ、二階部分のみが残っています。そして体育館には「卒業証書授与式」の看板が掛けられたまま。もちろん、2011年3月11日から残ったままなのです。



繰り返しますが、この写真は 2015 年 11 月 22 日に撮影したものです。震災から 4 年(8)ヶ月、何も手が付けられていない地域が、現実存在することの意味を私たちは噛みしめなければいけません。

4 福島のかぜを感じる

2013 年 12 月 20 日（金）、学校法人立命館は、福島県と相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的に連携協力に関する協定を締結しました。これを記念して、協定締結記念フォーラムとして、「ふくしまとのこれまで」をテーマに、立命館大学、福島大学、明治大学の学生、立命館宇治高等学校の生徒らによる福島での活動報告が行われました。サトゼミからもパネリストとしてゼミ生が参加しました。締結のために立命館大学を訪れた内堀副知事は、2014 年の県知事選挙に出馬、当選を果たされ、2015 年現在、県知事を務めておられます。



2014 年度、サトゼミ有志は 2014 年度福島県主催委託事業「ふくしまからはじめよう。若い力による風評対策提案事業」に応募して採択され、新しい活動を始めました。

この事業は完全な公募で全国の 57 の団体から応募があり、15 の団体がプレゼンに進み、結果的に 9 の団体が採択されました。サトゼミからの 3 人は大学の食堂で福島県産の食材を使った「ふくしま定食」をポイント付きで提供し、ポイントがたまった人には、福島の食材を親などに逆に「仕送り」できるというアイデア（逆仕送 RU）を発表しました。



http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/category/r_na_hito/entry/?param=613

ヘイトスピーチ的な非難も受けましたが、この事業は概ね好評に終わりました。逆仕送 RU はもちろん、Ritsumeikan University の RU のダジャレですが、それはさておき、多くの人にご活用いただきました。

福島の食材を使う、というだけで懸念や不安を示される方がいたのも事実です。そして、ネット上で非難（批判でなく）してきたということもありました。しかし、立命館大学の災害復興支援室のみなさんを始めとして、教職員の皆さんがサトゼミの企画を支えてくれると言ってくれました。それによって多くの活動が可能になったのです。

福島は日本で3番目に広い県です。しかし、「福島第一原発事故」ということが、福島全体のイメージを悪くしたのです。その責任は原発の運営主体にあることは明確です。これまで安全だと言ってきたのに事故を起こしたわけですから。2014年11月の大学祭では、直売企画を行いました。大盛況でした。12月には立命館大学生協さんのご協力を得て「福島メニュー」を行いました。これも学生の皆さんから指示を受けましたし、逆仕送 RU を受けとった父母の皆さんからも評価をいただきました。「とてもいい事ですね。親子で考えさせられるテーマで子どもと話できました。風評被害がなくなるといいです。続けてください」「思いがけず娘からのプレゼントで、他県の食品を知る機会をいただいてうれしかった」などの声が多数寄せられました。





既に述べたことですが、2015年11月下旬、サトゼミ有志は再び福島県に向かいました。11月22日は浪江町訪問（前述）、そして23日は藤原紀香さんのトークショー。その直前、私は内堀知事とお会いして、拙著『心理学の名著30』を贈呈して記念に写真を一緒に撮りました。気さくでありしかも一本芯の通った内堀知事に感謝です。なお知事は、トークショー挨拶の中で、福島状況を「風評は根強く、風化は進む」と表現していました。興味深い表現ですが、福島のおかれた苦境を言い表しているようです。



そして、11月24日は福島県庁に風評・風化対策監という役職の方にお会いしました。福島県には風評・風化対策監という役職があることにまず驚きます。現在、この役職に就いているのは野地誠氏。短い時間ですが、この役職ができた背景やこの役職の担うべき仕事について聞いてみました。

****野地風評・風化対策監の話の概要****

福島県では、風評・風化対策強化戦略を設定している。その目標は、福島県産品や観光客の数値を少なくとも震災前の水準まで回復することである。教育旅行（修学旅行など）は直後に20%にまで落ち込み、回復したとはいえ昨年度は50%にしかっていない。桃の値段も震災前の70%にしかっていない。農業・観光、まだまだ復興の途上なのである。

福島から遠いほど、今は情報が伝わらない。しかし、地震直後の状況が強く印象づけられているために、情報が更新されない。復興の状況や子どもは元気、という報道はなかなか無く原発のトラブル・汚染水問題は起きるたびに報道されている。

こういう状況では、福島の農産物を敬遠する空気は変わりようがない。福島の米は食べ

たくないという人が17%に及ぶという調査結果もある。食品のセシウム基準はEUなどの

10倍厳しいし（食品衛生法に定める一般食品の基準値(100 ベクレル/Kg)以下のものしか

出荷できない)、福島の玄米は全量全袋検査を行っており、最も安全な米なのに、である。ちなみに、本年度の福島米において基準値以上はまだ検出されていないとのことである。

こうした状況において、福島県は2015年9月、福島県風評・風化対策強化戦略を決定した。正確な情報を「より伝わる」、「より共感が得られる」よう発信することを目標としている。詳細は（<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01010d/senryaku-sakutei.html>）参照。



エピローグ

以上、これまでの経緯も含め、浪江町の今（2015年11月現在）のレポートでした。

これに加え2016年2月7～9日も福島県を訪れました。初めて喜多方市に泊まりました。木之本漆器店店主・遠藤久美氏他と面談したり、震災以降の話を聞いたりしました。実は木之本漆器店は私の母の実家です。40年ほど前までは「おばあちゃんち」に良く来てましたが、オトナになってからはすっかり途絶えてました。こうして縁が復活したのもうれしいことです。ちなみに子どもの頃しか来ていなかったのも、喜多方で酒を飲むという経験自体が私にとって不思議な感覚でした。



最後に、これまでサトゼミでは、福島の問題を対象にした卒業論文が毎年書かれていま

す。2014 年と 2015 年には笹谷仮設住宅の住み込みフィールドワークを女子学生が行っています。浪江町の住民の皆さんに可愛がられているからこそ可能なことであり、関係各位に感謝したいと思います。

さらに蛇足。福島に足を運ぶたび、些少ではあるが寄付をさせていただいている。公的な記録が残るという意味でも、学生が良いことをして新聞に載るという意味でも貴重な場である。

東日本大震災
義援金
民報教育福祉事業団
◆8日▼立命館大文学
部応用社会心理学受講生
有志が2万円 卒業生の
天野丞可(しょうか)さ



左から佐藤教授、山地
さん、天野さん、木戸
さん

ん、4年の山地絵里加さ
んが「東日本大震災から
の復興に役立ててほし
い」と事業団事務局に届
けた。文学部の佐藤達哉
教授(社会心理学、元福
島大行政社会学部助教
授)、立命館グローバル
・イノベーション研究機
構専門研究員の木戸彩恵
さんが一緒に訪れた。